

収録・解説 酒井董美

語り手 大原寿美子さん  
(明治40年生まれ)

平成元年8月24日収録

あらすじ

昔。高山に、おりゅうという器量のよい娘がおり、高山を越えた大きな家に女中に行っていた。

高山の尾根に大きな柳があり、柳の精(しん)がおりゅうに惚(ほ)れて人間に化け、毎晩会いに行く。おりゅうもまた柳に会いに行くなどして、心を交わしあっていた。

年がたち、おりゅうが高山の峠を越え家に帰っていても、お互い毎晩会いに行っていた。事情があって行けないときには、大きな風が吹いて柳のざわめきの声や音(ね)が聞こえたり、木の葉が

## おりゅうと柳

(八頭郡智頭町波多)



イラスト・福本隆男

## 三十三間堂棟木の柳

めて、生きて顔じゃあな木は、杉でもヒノキでもない。「うん、毎晩会って来たけど、もう会えんか知らん」

「どんなこっちゃろう人の杉(すま)＝きこり)ではどうにもいけない。あっちからもこっちか

ある晩、いい男の侍が 青ざめておりゅうのこ 間堂の普請が始まっていは、みんな呼んで来て、ろへ来た。「ひどう青ざた。その三十三間堂の棟 としてのきぎりで一日中

柳を伐るのは、一人や二

とみ通りになっている。いかに引張っても簡単

と神さんを一生懸命に拝

解説

「それじゃあ」と、そ

こで大きな火を柳さんの

も、みんな大きな火を焚

昨日、柳を伐っただけ伐

とみんなは喜び、柳を伐

(元鳥取短期大学教授)

(水曜日に掲載)